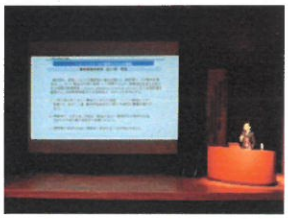
香教連新聞　第485号　2020年（令和２年）　２月10日発行　（発行の定日　毎月10日発行）　平成４年７月24日第３種郵便物認可

佐々木邦彦氏を迎えて教育講演会開催！

香川県教育文化研究所は香川県小中学校管理職員協議会との共催で毎年開催している教育講演会を二月八日（土）十三時三十分より香川県教育会館ミューズホールにて開催した。今年度は、前香川県教育委員会教育次長、現在文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特別支援教育企画官の佐々木邦彦氏をお迎えし「小中学校における特別支援教育の現状と課題」と題し、御講演いただいた。佐々木氏は、平成二十九年から香川県教育委員会教育次長として二年間、御尽力いただいており、香川の教育に対しても深く御理解いただいている。

当日は一五〇名を超える先生方が参加された。『特別支援教育の現状』『教員の専門性や資質の向上』『ＩＣＴ活用の推進』『特別支援教育で得られた知見やノウハウの還元・活用』の主に四つ視点から、詳しく話していただいた。昨今、特別支援教育の対象となる児童生徒数の増加にに伴い、特別支援教育の枠組みをどう考えるか、また、学校等はどのように対応していくのかなど、最新のデータや文科省・厚労省から示されている資料などを提示して詳しく説明していただいた。



参加者からは、「特別支援教育の対象となる児童生徒の増加によって、教職員の専門性や資質の向上が不可欠であることやＩＣＴが効果的に活用できる環境整備などを進めていく必要もあることなどを説明していただき、とても勉強になった。」といった感想が挙げられ、大変有意義な研修会となった。

香教連

香川県教職員連盟機関誌
発行所：香川県教職員連盟
発行者：北村　顕吾

〒760-0004
高松市西宝町２丁目４番６０号
香川県教育会館６０２号

TEL (087) 835-2721
FAX (087) 835-2723

E-mail:info@kakyoren.com

毎月10日発行　定価１部50円
（年間1,000円　送料とも）
会員の購読費は会費の中に含む

香教連は、結成四十五年を迎えた、子供中心の教育を目指し、健全なる批判力をもつ、県内最大の教職員団体です。

現場で先生方の力が最大限に発揮できるように！

一月二十九日（水）、香川県庁北館四階四〇四会議室において、香川県教育委員会へ「人事に関する要望」を開催した。香教連からは北村顕吾委員長他四名が出席、県教委側は工代祐司教育長他七名が対応していただいた。主な重点要望は次の通りである。

○小学校高学年における外国語（英語）の全面実施にあたり、子どもたちにより質の高い英語教育を受けさせるために、各小学校への英語専科担当教員の配置や、英語教育充実のための小中学校連携事業の取組をさらによりよいものに充実させていくための中学校英語科教員の計画的な増配置の推進

○組織的な教育力を充実させるため、学校の実態に応じた人材の増配置を行うとともに、積極的に市町教育委員会に働きかけること

○若年教員の増加に伴い、結婚等特別な事情がある場合、本人の置かれた状況を勘案した人事異動を行うこと

○管理面接において各自の勤務地域について確認するとともに、地域間異動の経験を考慮した人事異動とすること

○校種間異動について、管理面接等で確認をしっかりと行い、本人の意思を尊重した人事異動とすること

○公立学校教員採用選考試験において、講師に対する特別選考の継続と優秀な人材の確保

また、十二月に会員の先生方に提出していただいた会員票を元に一人一人の異動希望をまとめた。地域間異動の希望については、北村委員長が一月下旬に県教委、各教育事務所に要望した。地域内での異動希望や強い留任希望等については、各単組が各教育事務所、各市町教育委員会に確実に要望している。今後も先生方のライフプランを考えた人事異動となるよう、継続して要望していく。

なお、重点項目の回答については、香教連ホームページ（教育情報→令和元年度人事交渉）を御覧ください。

温故知新

一面の上段にも掲載しておりますが、先日の教育講演会において、香川県教育委員会教育次長在任中、大変お世話になった、現在文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特別支援教育企画官の佐々木邦彦様に「小中学校における特別支援教育の現状と課題」と題して御講演いただきました。佐々木様に講師を依頼した際、これからの教育には特別支援教育の観点を取り入れた学校経営・学級経営が不可欠であることを御示唆していただき、前文にあるテーマで現職の先生方に話していただきました。そこで今回は、ＡＤＨＤやＬＤの児童生徒に具体的にどのような手立てが必要なのか、様々な手立てがある中でも、すぐにいつでも実践できると思い、私が現場で必ず意識して取り組んでいたことを紹介します。もちろん現場にかえってからも引き続き実践します。これは、私が今でも尊敬するある先輩の先生（元校長先生）から常に御指導していただいたことです。

ＡＤＨＤの多動性、衝動性は、自分の意志とは別で、気が付いた時には、すでにスイッチが入っています。ＬＤの子どもたちは、特定の能力（話す、聞く、計算するなど）が困難であり、本人の苦労が周りには見えにくく、過度の要求には応じきれません。学級でパニックになるのは、自分が「どうしたらいいかわからない」状況にあるからです。どのクラスにも、このような状況の子どもたちがいると思って日々の学級経営に取り組む必要があります。

①ほめる場面、認める場面をつくる

何をどうやって頑張ればいいのかわかれば、子どもたちも力を発揮できる。例えば、離席する子には「座っていなさい。」と注意するより、「今の時間は座っていられたね。」とほめる。「五分間座っていられたら、シールを貼ろう。あなたが頑張った証拠を、一緒に積み上げよう。」と、約束の時間（共有する時間）を少しずつ増やしていく。また、役割を与えて遂行できるように支援し、できたときにほめる。職員室にものや手紙を届ける、花瓶の水を取り替えるなど、その子ができそうなことを見つけ、実践させ、自己有用感を支えていくことが大切である。

②参加できる場面をつくる

発言したくて指名しなくてもしゃべる子には「あと二人指名したら、Ａさんを指名するよ。」と言ったり、「まず、先生にだけ教えてよ。」と教師の耳元でささやかせたりして、順番を待つことを教える。「発言の機会を認めてくれた。」という気持ちが、多動性や衝動性を少しずつ抑えることにつながる。共同作業にも意図的に参加させた。平均台など重いものを一緒に運ばせ「一緒に運んでくれて助かったよ。」と感謝の気持ちを伝える。自分の役割が見つかると、積極的にかかわる子に育っていく。係活動やクラブ活動などの中で、また、学校行事で能力を発揮できる子も少なくない。得意とすることで自己実現を図る。この原理を体験させることは、彼らの生涯をも支えることにつながるのである。

③周りの子の気持ちも大切に

落ち着いて勉強したいのに、私だって先生に甘えたいのに、という感情が周りの子にたまってくる場合がある。時機をとらえ、周りの子から困っていること、我慢していることなどを聴き出し、危険なことや嫌な気持ちになることは、はっきりと先生に伝えて、クラス全体で解決できるようにしていくことを話す。その上で、その子も問題解決のために頑張っていることを伝える。みんなで問題解決をし、困ったことや我慢していることなどを話し合えるクラスにしていこうと、メッセージを伝えることも重要である。

これらことは全ての児童生徒に対して当てはまるということを意識し実践していくことが責務であると考えています。（顕）